

# 学 位 論 文 要 約

## 文学の学習指導における 「ワイダー・リーディング(Wider Reading)」の研究

### 【資料構成】

1. 論文の構成・・・1
2. 研究の目的と方法・・・2
3. 各章の概要・・・6
4. 主要参考引用文献・・・10

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期  
教育学習科学専攻 教科教育学分野  
国語文化教育学領域

松 岡 礼 子

## 1. 論文の構成

<b>序章 研究の目的と方法</b>	<b>1</b>
第1節 研究の目的	1
第2節 研究の方法	4
<b>第1章 イギリス前期中等教育課程におけるワイドー・リーディングの検討</b>	
；副読本 <i>After the Bomb : Brother in the Land and Wider Reading</i> (「核戦争を扱った小説作品のよみ」)の考察にもとづいて	5
第1節 1980年代から1990年代にかけての中等国語科メディアセンター (the English and Media Centre) の副読本編纂状況およびイギリス教育政策の動向	5
第2節 副読本の全体構成から読み取れるワイドー・リーディングの構造化	19
第3節 小説「弟を地に埋めて」の精読とワイドー・リーディングの学習指導構想の検討 ：単元(13)「ワイドー・リーディングの手引き」の考察に基づいて	24
第4節 小説「弟を地に埋めて」の精読と映像化の学習指導構想の検討 ：単元(4)「小説冒頭部の映像化」の考察に基づいて	30
第5節 まとめ	42
<b>第2章 読むことへの関与を促す教材選択と学習指導構想の検討</b>	<b>43</b>
第1節 芥川龍之介「鼻」と村上春樹「沈黙」の教材化	43
第2節 2年間のカリキュラムにおける精読プログラムの位置付けと意義	44
第3節 芥川龍之介「鼻」を用いた学習指導の検討	48
第4節 村上春樹「沈黙」を用いた学習指導の検討	62
第5節 読むことへの関与を促す教材選択と精読プログラムの意義	70
<b>第3章 マルチモーダル・テキストの学習材化と授業実践の検討</b>	<b>71</b>
第1節 高等学校におけるマルチモーダル・テキストの理解方略指導	71
第2節 映画を用いた長編小説「こころ」の精読指導	83
<b>第4章 長編小説の学習指導方略の検討</b>	<b>99</b>
第1節 高等学校「現代文」における読書会型授業展開の検討	99
第2節 読み深めのための発展的再読を促す学習指導の開発	110
第3節 高等学校国語科で長編小説を扱う意義	123
第4節 長編小説の精読の方法	134
<b>結章 研究の総括と展望</b>	<b>135</b>
第1節 研究の総括	135
第2節 研究の展望	138
<b>参考文献</b>	<b>139</b>

## 2. 研究の目的と方法

### (1) 研究の目的

本研究「文学の学習指導におけるワイダー・リーディングの研究」に言う「ワイダー・リーディング」(wider reading)は、1990年にイギリスで刊行された副読本において提案された読みの方法であり、筆者が実践者として文学教育の構想における核としてきた指導方法である。

副読本 *After the Bomb : Brother in the Land and Wider Reading* (「核戦争を扱った小説作品のよみ」)は、イギリスで「英語(国語)科ナショナルカリキュラム」が法令化された1990年に、ロンドンの非営利団体 the English and Media Centre (EMC) から刊行された。教科書も学習指導要領もなかった彼の国において、1986年に改められた中等教育修了試験 GCSE の受験学年を含む前期中等教育課程の学習者(13~16歳)を対象にして、教育改革のただなかで編まれたテキストである。主教材に選ばれたのは、米ソの核軍備競争の緊張が高まる1984年にイギリスの児童文学作家ロバート・スウィンデルスが著したディストピア小説 *Brother in the Land* (邦訳「弟を地に埋めて」)であった。ロンドン大学の研究者と現職教員が理論と実践のフィードバックを経て EMC から世に問うた副読本は、同時代の文化社会的背景に与して文学教育の学習指導を提案したという意味において、最前線の取り組みであったと言える。

筆者は、副読本の提案するワイダー・リーディングの学習指導の考察に臨み、その成果を1998(平成10)年度修士論文「イギリス前期中等教育におけるワイダー・リーディングの研究」にまとめた。一冊の小説を丸ごと読むための方法、フィクションからノンフィクションへ、詩へ、映画へとジャンルを超えた読む道筋の提案を考察し、精読と多読を有機的に結ぶ方法論として副読本におけるワイダー・リーディングを位置付けた。

そして、この位置付けが後に「精読(close reading)とは何か」という問いを生む。「ワイダー・リーディングとは何か」を問うなかで逆照射されるかたちで精読をめぐる問いが無視できなくなったのである。

山元(2018)によれば、精読をめぐる問いは現代アメリカの読むことの指導論のなかでもクローズアップされている<sup>1</sup>。アメリカの比較文学者フランコ・モレッティ(2009)は正典の精読に固執せずに世界文学論を構築せんとする提案を「遠読」(distant reading)という造語を用いておこなった<sup>2</sup>。これに反応するかたちで、同じくアメリカの比較文学者ジョナサン・カラー

(2010)は、精読の起源(アメリカの新批評とフランスのテキスト分析の歴史)を掘り起こしながら、脱構築批評の開拓者ポール・ド・マンの回顧する伝説の英文学教授による英詩の本物の精読の授業や、構造主義の論者ロラン・バルトによる小説の優れた精読の実践を引用して、「読む者にとっての意味を作品から生み出すために」「ゆっくり立ち止まって読む」精読のダイナミズ

---

<sup>1</sup> 山元隆春(2018)「文学作品の「精読(close reading)」の方法をどのように学ばせるか? : 登場人物の「予想外の行動」を道標として」広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座『論叢国語教育学』(14) ,pp.53-72.

<sup>2</sup> 「スタイル株式会社: 7000 タイトルの省察(1740年から1850年の英国小説)」フランコ・モレッティ著, 秋草俊一郎, 今井亮一, 落合一樹, 高橋知之訳(2016)『遠読: 〈世界文学システム〉への挑戦』みすず書房, pp.247-286.

ムを、その一口には言いあらわしがたい豊穡さと創造性と可能性を、論じた<sup>3</sup>。イギリスの英文学者テリー・イーグルトン（2011）もまた、21世紀に入っておこなわれた優れた精読の実践である<sup>4</sup>。我が国においては2014年にイギリス・ロマン派学会が「過去の文学研究の伝統を『精読』に負わせ、その『精読』を21世紀がどう継承するかを考えよう」と「21世紀のロマン派研究と精読の可能性」と題した創立40周年の記念シンポジウムを行っている<sup>5</sup>。なお、50年間にわたり教壇に立ち続け、2013年に101歳で逝去した国語教師・橋本武は、小説「銀の匙」を中学3年間かけて読み込む「スロー・リーディング」（slow reading）の授業実践者として名を知られたが、96歳で「源氏物語」の完全現代語訳を遂行しているとおおり、彼のライフワークは古典の精読（close reading）にあった<sup>6</sup>。

こうした21世紀に入ってから文学教育における精読再考の動きは、「どのように精読をさせるか」という問いが古くて新しい問いであることを想起させるにとどまらず、それを問い続けることに新たな知の創造への期待がこめられていることへの着目を促す。精読のダイナミズムを説いたカラーの論は、「精読とは何か」という問いに答えきれないことが問題なのではなく、「どのように精読をさせるか」という問いが問いきれないことを問題にした点で、示唆に富む。そして、モレットのレトリカルな造語が精読を逆照射する契機となるように、副読本の wider reading に込められた、伝統的な英文学の精読をめぐる問いを喚起する逆説的な仕掛けに気づくと、この角度からの副読本の「ワイド・リーディング」（wider reading）の考察と学習指導構想の必要性を覚えるにいたった。

修士論文に取り組んだ当初は、自身の義務教育課程（1981～1989年）において経験のない案は「目新しく」思えるもので、興味・関心は映画や教科書外の素材の教材化というソースの考察に向かった。しかし我が国では、文化社会的要請に応じた柔軟な素材選択と学習指導構想の必要性は、既に研究者に指摘されて久しい課題であった。倉沢栄吉（1974）によって「もう今日は教科書をつついている時代ではないのだ、世の中は現に映像媒体が中心になっているのだからその方をもっと活用すべきであって、文献ばかりにくっついてはいけいないのだ、つまり、読むということは、活字を読むということばかりではなくて、活字以外のものまでも認識することを言うのではないか」と「脱文字・脱教科書論」（浜本、2015）が発せられたのは、1972年の「国語教育講義」においてであった。倉沢の「新単元主義」の理念をまとめた田近（2013）は「常に現場と関わり、現場教師と交わりながら、それ故に最も先進的にして実践的な国語教育理論を構築してきた」倉沢が「脱工業化による情報化社会を背景に、創造性開発と情報読書とを教育の重要課題として受け止め」、「川崎市の教師たちに向かって、自分の問題意識を言語化しながら直に語りかけ」たものと発言当時の背景を説明している<sup>7</sup>。

<sup>3</sup> Culler, Jonathan (2010) The Closeness of Close Reading, *ADFL Bulletin*, 149, pp. 20-25.

<sup>4</sup> テリー・イーグルトン著、川本皓嗣訳（2011）『詩をどう読むか』岩波書店

<sup>5</sup> 笠原順路他（2015）「イギリス・ロマン派学会第40回(2014年)全国大会シンポジウム要旨 21世紀のロマン派研究と精読の可能性：「距離」をめぐるいくつかのアプローチ」*Essays in English Romanticism* (39・40), pp.151-185.

<sup>6</sup> 橋本武（2012）『〈銀の匙〉の国語授業』岩波ジュニア新書

<sup>7</sup> 倉沢栄吉（1974）『国語教育講義：新時代の読書指導を中心に』新光閣書店

1999年以降は中等国語教室の実践者として、現場でワイダー・リーディングの学習指導を展開してきた。複数の現場で学習者の多様なニーズに応じていく上で、指導構想は、まず学習者が読むことに没入できる魅力的な教材の発掘に始めるべきだと学んだ。これは、副読本の理論と合致するところである。一方で、副読本は6～8週間で学習される短期プログラムの提案であって、1年間ないしは3年間の長期的な教授プログラムを構想するには、作品そして単元を結ぶ核となるものが、必要になる。ここから、指導構想の核となる軸を学習者反応分析に求めることになる。それはワイダー・リーディング実践を実証的に論じるためにも必要な選択であった。

読者反応理論の展開をふまえた我が国の国語科教育研究は山元（1998,2005,2014）、上谷（1997）によって牽引されてきた<sup>8</sup>。山元（2014）は読者反応を核とした「読解力」育成のための足場づくりを可能にする国語科授業の構築について、多角的な視点から考察を展開したものである。なかでも学習者反応分析のとらえかたにおいて意義深いのは、次の問題提起である。

従来の国語教育学における「読者反応研究」には、作品に対する読者の書き言葉による反応を分析的に捉え、検討するものが少なくありません。このため、個々の読者の作品解釈の内実を明らかにするものにはなっても、それらが授業などの社会的な場面でどのようにかたちづくられるのかということについての解明は十分に為されていません。米国をはじめとする研究動向を検討してみると、ビーチらは、おもに読者反応理論と社会文化的学習理論に依拠しながら、子どもの読みの学習指導の問題における「足場づくり」の問題をクローズアップし、ここでは教師自身の「読み」に関する考えを省察していくことの必要性が強調されています。筆者も、ローレンス・サイプらによる絵本と読み・書きの教育についての研究をふまえ、「読み」に関する各自の考えの省察の基礎となるのは「グループ・ディスカッション」（小グループでの話し合い）で交わされる反応のやりとりの研究であると考えて、その方面の研究を進めてきました。（7-8p）

学習者個々の「解釈の内実」が「授業などの社会的な場面でどのようにかたちづくられるのか」ということについての解明が不十分だという問題提起は、授業の作用力と学習者の意味生成の関係性を捉えるための十分な分析があるかという基本的な問いに立ち戻らせる。この問題に対して山元は「小グループの話し合い」で「交わされる反応のやりとりの研究」をもって克服する道を示している。次いで「教師自身の『読み』に関する考えを省察していくことの必要性」の指摘は、学習指導構想のみならず実践研究に通ずる基本的な約束事の確認ととらえた。

---

浜本純逸監修・奥泉香編（2015）『メディア・リテラシーの教育：理論と実践の歩み』溪水社

田近洵一（2013）『現代国語教育史研究』富山房インターナショナル

<sup>8</sup> リチャード・ビーチ著、山元隆春訳（1998）『教師のための読者反応理論入門：読むことの学習を活性化するために』溪水社

山元隆春（2005）『文学教育基礎論の構築：読者反応を核としたリテラシー実践に向けて』溪水社

山元隆春（2014）『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』溪水社

上谷順三郎（1997）『読者論で国語の授業を見直す』明治図書



以上を踏まえ、本研究では次のような諸課題を設けた。

- ① 副読本 *After the Bomb : Brother in the Land and Wider Reading* (「核戦争を扱った小説作品のよみ」)におけるワイダー・リーディングの学習指導における精読のダイナミズムを考察する。(第1章)
- ② ワイダー・リーディングの提案性を、学習者反応を核とした読むことへの関与を促す学習指導構想において実証する。(第2章・第3章)
- ③ ワイダー・リーディングの年間カリキュラム構想(読書会、短歌創作を用いた再読、作家研究入門単元)を考察し、精読のダイナミズムを明らかにする。(第4章)

なお、2～4章の考察には、2005～2018(平成17～30)年度に、高等学校三校(いずれも共学)で行った実践を用いる。各対象学年、単元、主要教材の詳細は、以下の通りである。

大阪府・私立A校(2005-2007)	高1 国語総合	芥川龍之介「鼻」(第2章第1節)
	高2 現代文	村上春樹「沈黙」(第2節)
京都府・私立B校(2011-2013)	高2 国語表現	テレビCM(第3章第1節)
	高3 現代文	夏目漱石「こころ」(第2節)
大阪府・国立C高(2017-2018)	高2 現代文	夏目漱石「三四郎」(第4章第1節)
		芥川龍之介「地獄変」(第2節)
		カズオ・イシグロ「日の名残り」(第3節)

## (2) 研究の方法

本研究において用いる方法は以下の三つである。

### (1) 副読本 *After the Bomb : Brother in the Land and Wider Reading* の考察

ロンドンの中等国語科教育センター(the English and Media Centre: EMC)から編集・出版された副読本 *After the Bomb : Brother in the Land and Wider Reading* (核戦争を扱った作品のよみ)におけるワイダー・リーディングの学習指導を考察し、我が国の文学教育に対する提案性を述べる。まず、副読本刊行の背景について、母体となるEMCの出版刊行状況および教育政策の動向を概観する。次に、核戦争をテーマとした異なる作品への読み広げ・読み深めの方法の提案を考察し、副読本におけるワイダー・リーディングの学習指導観を明らかにする。続いて、現代児童文学を学習材として用いる文学指導観と長編小説の精読と読み深めの指導構想を明らかにする。最後に単元「小説冒頭部の映像化」を考察・検討し、その提案性を明らかにする。

### (2) ワイダー・リーディングの学習指導開発

副読本の提案性をもとに、我が国におけるワイダー・リーディングの学習指導を構想し、展開する。本研究で用いるのは2005年から2018年に実施した授業実践である。

### (3) 学習者反応分析

学習者の成果物を分析し、授業の作用力と学習者の意味生成について考察をおこなう。

### 3. 各章の概要

#### 第1章 イギリス前期中等教育課程におけるワイドー・リーディングの検討

：副読本 *After the Bomb : Brother in the Land and Wider Reading* (「核戦争を扱った小説作品のよみ」)の考察にもとづいて

本章では、まるごと一冊の本を教材化し、作品の読み深めと読み広げを提案する副読本 *After the Bomb : Brother in the Land and Wider Reading* (「核戦争を扱った小説作品のよみ」)の内容と構成を考察してワイドー・リーディングの学習指導観を明らかにした。

第1節では、副読本の考察意義をイギリス前期中等教育の史的背景をふまえて明らかにし、ワイドー・リーディングの「ワイドー (wider)」の意味するところを教育政策に関わる三つの言説、すなわち「GCSE 全国共通評価基準」、「改訂版 NC 国語」、「GCSE 試験実施要綱」のなかで捉えた。

第2節では、副読本の前半単元群と後半単元群双方におけるワイドー・リーディングの構造化を観点別に検討した。なかでもワイドー・リーディングの学習指導観が最も特徴的にあらわれた単元として、前半単元(4)「小説冒頭部の映像化」と後半単元(13)「ワイドー・リーディングの手引き」を指摘した。

第3節では、単元(13)「ワイドー・リーディングの手引き」の中央の図が、さまざまな共通点をもとに分類され、結びつけられるテキスト群の分派と関連性を見取り図であることを述べた。そして、タイプ、ジャンル、メディアをこえて、複数の多用な学習材を読み広げていくワイドー・リーディングを、単なる感想や印象を書きとめるだけに終わらせず、ひとつの国語教育の学習として成立させるために、その比べ読み重ね読みを基軸に、精読の基本的観点を無理なく活用することが必要不可欠だとする考えは、単元(13)の11の指導のみならず、副読本全体の編集方針であることを明らかにした。

第4節では、単元(4)「小説冒頭部の映像化」の考察の結果、映像を見ることによって学ばれるべき点が、小説の読みの観点と同じであることを明らかにした。冒頭部への着目、舞台設定、プロット、先の展開を予想すること、すなわち、物語の構造を明らかにするための基本となる分析の観点に着目するとき、小説と映画は同じ平面において論じることができる。

第5節では、核戦争というテーマ設定について考察した。核開発は経済的社会的文化的に影響力を持つテーマであり、副読本は批判的に読むためのテキストに政府刊行物をも取り上げる。多様なテキストを用いるということは、多様な言説に出会わせるということであり、そこで多様な言説の価値判断をおこなうのは学習者である「私」である。このようにとらえ、最終的には自分の言葉で自分の考えを統合し、「私」はどのように社会参画するのかを学習者に表現させることが、副読本「核戦争を扱った小説作品のよみ」が提案する学習指導としてのワイドー・リーディングの目指すところであると考えた。

#### 第2章 読むことへの関与を促す教材選択と学習指導構想の検討

第2章以降は、ワイドー・リーディングを我が国の国語教室で展開した実践の検討である。

第2章では、実践者が、学習者の読むことへの関与にどのような質的な変化を求めて、素材選択、授業、単元、カリキュラム構想をおこない、学習者反応をどのように分析して実態を評価しようとしたか、そのことの可能性と課題は何なのかを述べた。

第1節では、私立 A 校における学習者実態に即した教材選択の事例として、芥川龍之介「鼻」と村上春樹「沈黙」を取り上げ、素材性および文学性について概説した。

第2節では、芥川龍之介「鼻」と村上春樹「沈黙」を用いた精読プログラムが、高1「国語総合」と高2「現代文」の2年間のカリキュラムにおいてどのような位置付けにあり、どのような意義をもつものであったかをカリキュラムの基本留意点を詳述して明らかにした。

第3節では、高1「国語総合」において展開した小説「鼻」の精読プログラムを考察した。学習者の初読の感想を考察して読みの傾向を明らかにし、書き出しの分析から書くことの指導の手立てを考える経緯を詳述した。前者において明らかにしたのは、主人公が「自尊心の毀損」の「回復」を願うという小説冒頭部の設定が作品結末部で回収されぬがゆえに読み手が抱える読みづらさである。それを乗り越えるための手立てとして、類語反復（「のびのびした気分」「はればれした心持」）に着目した再読の指導があった。

第4節では、前年度の小説「鼻」の読解学習を受けて展開した、高2「現代文」における小説「沈黙」の精読プログラムを考察した。学習者のひとり読みの成果と、精読の指導を受けた結果としての学習の成果とを比較検討し、学習者それぞれが読みの方略を複数あわせ持つことが、作品の再構築の可能性を広げ、学習者の感想文に質的な違いを生じさせることを明らかにした。

第5節では、読むことへの関与を促す教材選択と精読プログラムの意義を明らかにした。作品の個々のねらいに即した指導の違いがあっても、精読の授業の意義は、おしなべて、学習者が読みの方略を体得することにある点で共通している。さまざまな作品との出会いを経て、複数の読みの方略を併せ持つようになることで、彼らは主体的な読み手として豊かに読書生活を築いてゆける。そのためにも、指導者は、作品にいかに出会わせるかにこだわった。その結果が、素材選びへの配慮であり、作品の読みの観点の共有を目指した精読の授業であった。

### 第3章 マルチモーダル・テキストの学習材化と授業実践の検討

本章では私立 B 校における CM と映画を用いた2単元を考察し、ワイダー・リーディングの学習指導において、マルチモーダル・テキストの活用が高校生の言葉の学びにもたらす意義を、実践に即して明らかにした。

第1節では、高2「国語表現」の単元「CM分析」の実践を考察した。まとめの課題に具現化した、マルチモーダル・テキストの理解方略指導の提案について、その可能性と課題を学習者 A 子の反応分析をもとに論じた。

第2節では、前年度の単元「CM分析」において「見る」テキストに対する分析の構えを体得させた学習者を対象に展開した、高3「現代文」の映画を用いた長編小説「こころ」の精読指導を考察した。学習指導を、前半—評論と翻訳を活用した精読入門と、後半—映画を用いた小説の精読指導とにわけ、後半の映画を用いた小説の読解指導の学習指導は図式化し、その体系を明らかにした。

### 第4章 長編小説の学習指導方略の検討

本章では、国立 C 校の高2「現代文」の1年間の年間カリキュラムにおいて展開したワイダー・リーディングの学習指導構想を考察し、長編小説を用いた3つの単元において、どのような精読を促し、それが学習者の意味生成にどのように作用したかを検討した。教材は順に、夏目漱石「三



四郎」、芥川龍之介「地獄変」、カズオ・イシグロ著、土屋政雄訳「日の名残り」である。作品の性質によって異なる精読の方法を構想した。順に、読書会型アプローチで学習者の対話を生み出す、条件付き短歌創作を用いて再読を促す、同時代作家の小説および周辺資料を用いて作家の創意そのものに迫らせる、というものであった。

第1節では、小説「三四郎」の読書会を考察した。最初の3回は長編小説の読書に不慣れな学習者の「ひとり読み」を支援する場として機能した点で、一定の成果をあげたと言える。「私の一文」の初稿を完成させてはじめて、「読み深まり」の萌芽が学習者の中に見出せた感があり、その機をとらえて構想した4回目読書会においてようやく、すべての学習者が読書会の主体になり得た。しかしながら、学習者の言葉を掘り起こし、作品批評に使える言葉を耕していくための有効な手立てとして、第4回読書会が機能したことを論じた。

第2節では、小説「地獄変」の発展的再読の意義を、手法として用いた短歌創作指導の成果の分析をとおして明らかにした。条件付き短歌創作は、みずからの理解をあらわす再創造の試みであり、良秀の造型を理解するための精読の提案であった。だが、短歌という形式をかりて理解を表現させる制約を設けたため、この提案には、短詩型文学の良さを生かしきるという点において課題があるがゆえに、こうした単元を構想する場合には、感動の中心を詠む、のびのびとした短歌創作の学習指導の時間を、他で十全に設ける必要があると述べた。

第3節では、考察対象に作家研究入門単元「カズオ・イシグロを読む」を取り上げた。この単元は、教科書教材偏重型、短編小説偏重型の文学教育への問題意識に基づく提案であり、これまでの提案〔映画を用いた小説読解を軸とした授業開発（3章第2節）、長編小説の読書を取り入れた単元開発（4章第1節）、学習者の読みの楽しみを大切に教材開発（4章第2節）〕の展開上にある。長編小説の基本的な鑑賞力を高めることを目的とした作家研究入門単元の実践を考察し、長編小説を国語教室で読むことの意義を明らかにした。

第4節では、各単元の各学習指導における精読の観点の設け方をとりたてて検討した。

小説「三四郎」の場合、最終章を丁寧に読み、特異性をみきわめ、そこから班ごとに6つの精読の観点を設けて話し合いを展開した。最終章の舞台は個展の会場である。作家はクライマックスにおいて読み手の注意を三四郎と美禰子に集め、絵画制作の進捗に気をめぐらす隙を与えない。クライマックスから最終章にかけては、集中と弛緩のリズムが明確である。小説「三四郎」のこうした特徴に応じて、舞台が大きく転換する最終章から精読の観点を探り、意味を求めて作品全体の再読に向かわせる方法を選んだ。

小説「地獄変」の「見たものでなければ描けぬ」良秀を芸術家とみなすかみなさないかを争点にした短歌創作は、はからずも学習者の「見る」という動詞への拘りを浮き彫りにすることになった。「見る」ことは良秀の拘りであり、「見る」行為の残酷さがクライマックスの中心である。焼かれ死ぬ姿を「見られる」側にいた娘への同情や憐憫を大切にする読みは、最後にとりあげた学習者二人の言葉にも明らかであった。

カズオ・イシグロ「日の名残り」を起点としたイシグロ作品群の読み深めの提案は、精読の観点を結末部における「信じる」の類語反復におき、部分から全体を読み直すというものであった。全員読書テキスト「日の名残り」から他のイシグロ作品の選書へと読書を継続することを通し、

みずからの知り得た情報にもとづいて作家イシグロを批評する作家入門単元の検討において、課題の提出率で読みへの関与度をはかるならば、本単元のプログラムのなかで、学習者の読むことへの関与が最も高められたのは、クラスメイトの作品紹介スピーチを聞く読書会であったことを明らかにした。読書体験の共有という段階を超えて、他者の読書体験を聞いて読書がしたくなる、読書が好きになるというところに、学習者の読むことへの関与が高まっていくさまをとらえた。そして、精読の観点にもとづく読み深め読み広げの学習指導方法が、「三四郎」の読書会にはないワイド・リーディングのダイナミズムの認められる読書会を可能としたと、精読指導を意義付けた。

## 結章 研究の総括と展望

本章では、これまでの検討をふまえて、本研究の可能性と課題を以下のようにまとめた。

### (1) 小中高をつなぐ、映像読解をとり入れた文学の学習指導体系の確立

「映画を用いた小説『こころ』の精読指導」のまとめにおいて、学習者の既存のリテラシーの把握と掘り起こしの必要性を述べた。小・中学校段階における実践と先行研究をふまえ、マルチモーダル・テキストを用いた文学の学習指導の体系化を考えたい。

### (2) 新設科目「文学国語」についての年間カリキュラムの提案

新学習指導要領の提案は「論理国語」か「文学国語」かという選択をうみ、文学教育が国語教室から駆逐される契機となるのではないかと懸念されている。なぜ文学が必要なのか、具体的な年間カリキュラムの提案をもって、論じていかなければならない。

### (3) 読書会の評価基準の設定

本研究では、読書会の取り組みには、読むことの学習において大きな可能性があることを示した。一方で、複数の成立条件を満たすことの必要性を明らかにした。本研究の実践では、アンケート形式で学習者に読書会のために参加者がすべきことを確認することで、約束事を明示し、回数を重ねることで、読書会が、本を読む集団の対話の場として機能していくさまを明らかにした。

成立条件を丁寧にふまえ、評価の枠組みを示すことで、読書会を読むことの有効な学習形態として提案していくことができると考える。

#### 4. 主要参考引用文献

〈国語科教育学〉

(単行本)

- 井上孝志 (2002) 『高等学校における文学の単元構想の研究: 「ころ」(夏目漱石)の教材解釈と実践事例の検討を通して』 溪水社
- 井上雅彦 (2008) 『伝え合いを重視した高等学校国語科カリキュラムの実践的研究』 溪水社
- 大村はま (1983) 『大村はま国語教室第六巻: 作文学習指導の展開』 筑摩書房
- 奥泉香編 (2018) 『国語科教育に求められるヴィジュアル・リテラシーの探究』 ひつじ書房
- 上谷順三郎 (1997) 『読者論で国語の授業を見直す』 明治図書
- 倉澤栄吉 (1974) 『国語教育講義: 新時代の読書指導を中心に』 新光閣書店
- 幸田国広 (2011) 『高等学校国語科の教科構造: 戦後半世紀の展開』 溪水社
- 佐藤泉 (2006) 『国語教科書の戦後史』 (勁草書房)
- 田近洵一 (2013) 『創造の〈読み〉新論: 文学の〈読み〉の再生を求めて』 東洋館出版社
- 田近洵一 (2013) 『現代国語教育史研究』 富山房インターナショナル
- 竜田徹 (2014) 『構想力を育む国語教育』 溪水社
- 田中実・須貝千里 (1999) 『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ1: 文学研究と国語教育研究の交差』 右文書院
- 田中実・須貝千里・難波博孝 (2018) 『21世紀に生きる読者を育てる 第三項理論が拓く文学研究/文学教育 高等学校』 明治図書
- 寺田守 (2012) 『読むという行為を推進する力』 溪水社
- 中洩正堯, 国語論究の会 (2014) 『高校国語実践の省察と展望』 三省堂
- 中西一弘 (1997) 『文学言語を読む (I・II)』 明治図書
- 西尾実 (1976) 『西尾実国語教育全集第八巻: 文学教育の問題』 教育出版
- 西辻正副 (1997) 『高等学校小説教材の読みの試み』 溪水社
- 難波博孝 (2008) 『母語教育という思想: 国語科解体/再構築に向けて』 世界思想社
- 橋本武 (2012) 『〈銀の匙〉の国語授業』 岩波ジュニア新書
- 羽田潤 (2008) 『国語科教育における動画リテラシー教授法の研究』 溪水社
- 八田幸恵 (2015) 『教室における読みのカリキュラム設計』 日本標準
- 浜本純逸監修・奥泉香編 (2015) 『メディア・リテラシーの教育: 理論と実践の歩み』 溪水社
- 府川源一郎・高木まさき, 長編の会 (1998) 『「本の世界」を広げよう』 東洋館出版社
- 増田信一 (1997) 『読書教育実践史研究』 学芸図書
- 間瀬茂夫 (2017) 『説明的文章の読みの学力形成論』 溪水社
- 松尾弥太郎編 (1971) 『集団読書』 国土社
- 松山雅子編 (2005) 『自己認識としてのメディア・リテラシー: 文化的アプローチによる国語科メディア学習プログラムの開発』 教育出版
- 松山雅子編 (2008) 『自己認識としてのメディア・リテラシー PARTII: 文化的アプローチによる国語科メディア学習プログラムの開発』 教育出版
- 松山雅子 (2013) 『イギリス初等教育における英語「国語」科教育改革の史的展開: ナショナル・カ

- リキュラム制定への諸状況の素描』溪水社
- 松山雅子 (2015) 『イギリス初等教育における国語科教育改革の研究：Centre for Language/Literacy in Primary Education の取り組みを中心に』 溪水社
- 松山雅子監訳 (2018) 『マルチモダリティ：今日のコミュニケーションにせまる社会記号論の試み』 溪水社
- 森本洋介 (2014) 『メディア・リテラシー教育における「批判的」な思考力の育成』 東信堂
- 明治書院編・全国高等学校国語教育研究連合会協力 (2014) 「高等学校国語科授業実践報告集現代文 編I小説編」 明治書院
- 山元隆春 (2005) 『文学教育基礎論の構築：読者反応を核としたリテラシー実践に向けて』 溪水社
- 山元隆春 (2014) 『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』 溪水社
- 山元隆春編 (2015) 『読書教育を学ぶ人のために』 世界思想社
- 吉田茂樹 (2012) 『対話による文章表現指導の研究：「個に即した支援」の理論と方法』 溪水社
- 渡辺春美 (1993) 『国語教授業活性化の探究：文学教材を中心に』 溪水社
- ナンシー・アトウェル著，小坂敦子・澤田英輔・吉田新一郎訳 (2018) 『イ・ン・ザ・ミドル ナンシー・アトウェルの教室』 三省堂
- アンドリュー・バーン著，奥泉香編訳 (2017) 『参加型文化の時代におけるメディア・リテラシー：言葉・映像・文化の学習』 くろしお出版
- リチャード・ビーチ著，山元隆春訳 (1998) 『教師のための読者反応理論入門：読むことの学習を活性化するために』 溪水社
- ジェニ・ポラック・デイ他著，山元隆春訳 (2013) 『本を読んで語り合うリテラチャー・サークル実践入門』 溪水社
- エリン・オリヴァー・キーン著，山元隆春・吉田新一郎訳 (2014) 『理解するってどういうこと?：「わかる」ための方法と「わかる」ことで得られる宝物』 新曜社
- C.A.トムリンソン著，山元隆春・山崎敬人・吉田新一郎訳 (2017) 『ようこそ，一人ひとりをいかす教室へ：「違い」を力に変える学び方・教え方』 北大路書房
- C.A.トムリンソン著，山元隆春・山崎敬人・吉田新一郎訳 (2018) 『一人ひとりをいかす評価：学び方・教え方を問い直す』 北大路書房
- (論文)
- 足立幸子 (2009) 「国際児童文学という視点からの読書指導」新潟大学教育学部附属教育実践総合センター『教育実践総合研究』8, pp.35-48.
- 足立幸子 (2010) 「国語科教育における初読と再読：物語の初読の過程解明を中心に」『全国大学国語教育学会発表要旨集』118, pp.41-44.
- 竜田徹 (2011) 「再読を励ます読書教育の探究：初読の価値づけ・権威づけを通して」広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座『論叢国語教育学』復刊2, pp.1-10.
- 難波博孝，松澤和宏，高木まさき，田中実 (2003) 「文学と教育における公共性の問題：文学教育の根拠」日本文学協会「日本文学」52(8), pp.1-35.
- 難波博孝 (2017) 『『文学国語』をどうするか』日本文学協会「日本文学」66(3), pp.92-97
- 山元隆春 (1991) 「文学の教授・学習に関する基礎理論の検討：ルイーズ・ローゼンブラットの『交



- 流理論』を中心に』『鳴門教育大学研究紀要教育科学編』6, pp.59-78.
- 山元隆春 (2003)「テキストのフラジリティと文学教育の根拠」日本文学協会「日本文学」52(3), pp.26-37.
- 山元隆春 (2007)『『失いつづけたすべてのものの打ち上げられる場所』と『行くべきところ』との間で：文学教育の『転回』と『希望』のために』日本文学協会「日本文学」56(8), pp.53-62.
- 山元隆春 (2008)『『交流理論』は学習者に何をもちたすか：『批評的読み』の基礎としての『審美的読み』』『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部（文化教育開発関連領域）』第57号, pp.107-116.
- 山元隆春 (2015)「読み・書きの学習における絵本の役割：フランク・セラフィニの議論を手がかりとして」『国語教育学研究の創成と展開』編集委員会編『国語教育学研究の創成と展開』溪水社, pp.277-296.
- 山元隆春・居川あゆ子 (2015)「中学校国語科におけるリテラチャー・サークル実践の展開：「少年の日の思い出」を扱う単元の場合」広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター『学校教育実践学研究』21, pp.35-45.
- 山元隆春 (2018)「文学作品の「精読 (close reading)」の方法をどのように学ばせるか？：登場人物の「予想外の行動」を道標として」広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座『論叢国語教育学』(14), pp.53-72.
- 勝田光, 澤田英輔 (2018)「リーディング・ワークショップによる優れた読み手の育成：1時間の授業過程の分析」『国語科教育』84(0), pp.58-66.

#### 〈イギリスの教育・文化・政治〉

(単行本)

- 大田直子 (2010)『現代イギリス「品質保証国家」の教育改革』世織書房
- 河島伸子, 大谷伴子, 大田信良編 (2012)『イギリス映画と文化政策：ブレア政権以降のポリティカル・エコノミー』慶應義塾大学出版会
- 木村浩 (2006)『イギリスの教育課程改革：その軌跡と課題 Education reform and curriculum development in England』東信堂
- 黒柳修一 (2011)『現代イギリスの教育論：系譜と構造』クレス出版
- 三時眞貴子 (2012)『イギリス都市文化と教育：ウォリントン・アカデミーの教育社会史』昭和堂
- 法政大学比較経済研究所, 曾村充利編 (2008)『新自由主義は文学を変えたか：サッチャー以後のイギリス』法政大学出版局
- 望田研吾 (1996)『現代イギリスの中等教育改革の研究』九州大学出版会
- レイモンド・ウィリアムズ著, 川端康雄編訳 (2013)『共通文化にむけて』みすず書房
- デイヴィッド・ヴィンセント著, 北本正章監訳 (2011)『マス・リテラシーの時代：近代ヨーロッパにおける読み書きの普及と教育』新曜社
- キャロライン・V. ギブス著, 鈴木秀幸訳 (2001)『新しい評価を求めて：テスト教育の終焉』論創社
- リチャード・ホガート著, 香内三郎訳 (1974)『読み書き能力の効用』晶文社
- ロイ・ロウ著, 山崎洋子・添田晴雄訳 (2013)『進歩主義教育の終焉：イングランドの教師はいかに



- 授業づくりの自由を失ったか』知泉書館
- ヒュー・ローダー他編, 荻谷剛彦・志水宏吉・小玉重夫編訳 (2012) 『文化と不平等の教育社会学』  
東京大学出版会  
(論文)
- 奥聡一郎 (2013) 「イギリスにおける言語教育と文学教材」 関東学院大学工学部教養科教室 『科学/人間』 42 号, 47-61.
- 木村浩 (2006) 「イギリスの教育課程改革—その軌跡と課題—」 東信堂
- 国立教育政策研究所 (2013) 『諸外国における教育課程の基準 近年の動向を踏まえて(教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書 4) 平成 24 年度プロジェクト研究調査研究報告書』
- 砂川誠司 (2016) 「国語科におけるメディア・リテラシー教育の評価に関する研究ノート : GCSE 試験問題(AQA2012)についての事例研究」 愛知教育大学国語国文学研究室 『国語国文学報』 74 号, 62-47.
- 中井悠加 (2016) 「現代イギリス GCSE 試験 English の内容と構造に関する一考察」 全国大学国語教育学会 『全国大学国語教育学会発表要旨集』 第 130 巻, 135-138.
- 藤井泰 (2013) 「イギリスにおける連立政権によるナショナルカリキュラムの見直しの動き : 『ナショナルカリキュラムの枠組み』(2011 年)を中心に」 松山大学 『松山大学論集』 第 24 巻第 6 号, 61-86.
- 鋒山泰弘 (2014) 『『育成すべき資質・能力』をめぐる論議とカリキュラム改革の課題 : 2014 年イングランドのナショナルカリキュラムの改訂をめぐる論点 (第 23 回大会報告 2014 年大会シンポジウム 日英のカリキュラム改革と学力観)』 日英教育学会 『日英教育研究フォーラム』 第 19 号, 23-28.
- 堀川照代 (2003) 「動向レビュー 英国の読書促進活動」 日本図書館協会 『カレントアウェアネス』 №276, 15-19.
- 山元隆春 (1989) 「イギリスの文学教育(4) —教育課程を中心に—」 中国四国教育学会 『教育学研究紀要第二部』 34 巻, 17-21.
- 吉田多美子 (2005) 「イギリス教育改革の変遷—ナショナルカリキュラムを中心に—」 国立国会図書館調査及び立法考査局 『レファレンス』 №658, 99-112.

〈文芸学・心理学・社会学〉

(単行本)

- 安藤宏 (2012) 『近代小説の表現機構』 岩波書店
- 安藤宏 (2015) 『「私」をつくる : 近代小説の試み』 岩波書店
- 井澤淳 (1973) 『映像という怪物』 學藝書林
- 出淵敬子編 (2006) 「読書する女性たち : イギリス文学・文化論集」 彩流社
- 石原千秋 (2004) 『漱石と三人の読者』 講談社
- 石原千秋 (2013) 『「こころ」で読みなおす漱石文学 : 大人になれなかった先生』 朝日新聞出版
- 市川崑, 森遊机 (2015) 『完本 市川崑の映画たち』 洋泉社
- 小川公代, 村田真一, 吉村和明編著 (2017) 『文学とアダプテーション : ヨーロッパの文化的変容』

春風社

- ツベタナ・クリステワ編 (2014)『パロディと日本文化』笠間書院
- 小森陽一 (2017)『構造としての語り・増補版』青弓社
- 芹沢栄編 (1990)『イギリス文学の歴史：An Outline History of English Literature』開拓社
- 田中実 (1996)『小説の力』大修館書店
- 戸松泉 (2002)『小説の「かたち」・「物語」の揺らぎ：日本近代小説「構造分析」の試み』翰林書房
- 富山太佳夫 (2003)『文化と精読：新しい文学入門』名古屋大学出版会
- 西原大輔 (2018)『本詩取り』七月堂
- 二七会編集委員会編 (2008)『漱石作品を読む：「二七会」輪読五十年』溪水社
- 野田高梧 (2016)『シナリオ構造論』フィルムアート社
- 畠山兆子，三宅興子，島式子 (1983)『新版 児童文学—はじめの一步』世界思想社
- 馬場重行，佐野正俊編 (2011)『〈教室〉の中の村上春樹』ひつじ書房
- 藤井淑禎 (1994)『純愛の精神誌：昭和30年代の青春を読む』新潮社
- 藤井淑禎 (2001)『小説の考古学へ：心理学・映画から見た小説技法史』名古屋大学出版会
- 廣野由美子 (2005)『批評理論入門：「フランケンシュタイン」解剖講義』中央公論新社
- 宮脇俊文編 (2017)『映画は文学をあきらめない：ひとつの物語からもうひとつの物語』水曜社
- 森松健介編 (2014)『新選 ジョン・クレア詩集』音羽書房鶴見書店
- 山田奨治 (2002)『日本文化の模倣と創造：オリジナリティとは何か』角川書店
- テリー・イーグルトン著，川本皓嗣訳 (2011)『詩をどう読むか』岩波書店
- ヴォルフガング・イーザー著，轡田収訳 (2005)『行為としての読書：美的作用の理論 (岩波モダンクラシックス)』岩波書店
- D.W.ウィニコット著，橋本雅雄・大矢泰士訳 (2015)『改訳 遊ぶことと現実』岩崎学術出版社
- ジョナサン・カラー著，荒木映子，富山太佳夫訳 (2003)『1冊でわかる文学理論』岩波書店
- エドワード・W.サイード著，村山敏勝・三宅敦子訳 (2013)『人文学と批評の使命：デモクラシーのために』岩波書店
- デイヴィッド・ダムロッシュ著，秋草俊一郎他訳 (2011)『世界文学とは何か?』国書刊行会
- ポール・ド・マン著，大河内昌・富山太佳夫訳 (1992)『理論への抵抗』国文社
- アンドレ・バザン著，野崎勸他訳 (2015)『映画とは何か (上・下)』岩波文庫
- ジョン・バージャー著，笠原美智子訳 (2005)『見るということ』筑摩書房
- ガストン・パシュラール著，岩村行雄訳 (2002)『空間の詩学』筑摩書房
- ミハイル・バフチン著，伊東一郎訳 (1996)『小説の言葉』平凡社ライブラリー
- ロラン・バルト著，花輪光訳『物語の構造分析』(1979) みすず書房
- ジェイムズ・モナコ著，岩本憲児他訳 (1983)『映画の教科書：どのように映画を読むか』フィルムアート社
- フランコ・モレッティ著，秋草俊一郎，今井亮一，落合一樹，高橋知之訳 (2016)『遠読：〈世界文学システム〉への挑戦』みすず書房
- ルネ・ユイグ著，池上忠治訳 (1969)『イメージの力：芸術心理学のために』美術出版社
- デイヴィッド ロッジ著，柴田元幸訳 (1997)『小説の技巧』白水社

(論文)

- 石原千秋 (1985) 『『こゝろ』のオイディプスー反転する語り』成城大学『成城国文学』(1), pp.29-40.
- 稲井達也 (2016) 『『こゝろ』の授業実践史ー教科書教材と学習指導の批判的検討』上智大学研究機構編『世界から読む漱石「こゝろ」』勉誠出版, pp.163-178.
- 海老澤豊 (2008) 「英国十八世紀初頭におけるピンダリック・オード」駿河台大学『駿河台大学論叢』(37), pp.81-103.
- 海老澤豊 (2009) 「英国十八世紀後半におけるピンダリック・オード」駿河台大学『駿河台大学論叢』(38), pp.39-58.
- 笠原順路他 (2015) 「イギリス・ロマン派学会第40回(2014年)全国大会シンポジウム要旨 21世紀のロマン派研究と精読の可能性: 「距離」をめぐるいくつかのアプローチ」*Essays in English Romanticism* (39・40), pp.151-185.
- 小森陽一 (1985) 『『こゝろ』を生成する『心臓(ハート)』成城大学『成城国文学』(1), pp.41-52.
- 野中潤 (2004) 「敗戦後文学としての『こゝろ』ー漱石と教科書」現代文学史研究所『現代文学史研究』2, pp.126-136.
- 平野嘉久子 (1980) 「長編小説『こゝろ』(夏目漱石)の学習指導ー感想文を中心としたグループ学習」広島大学教育学部光葉会『国語教育研究』(26中), pp.31-45.
- 藤井淑禎 (2008) 「市川崑の『こゝろ』」立教大学『大衆文化』創刊準備号, pp.9-17.
- 増淵恒吉 (1966) 『『こゝろ』の学習指導』日本文学協会『日本文学』15-7, pp.513-526.
- 三好行雄 (1988) 「ワトソンは背信者かー『こゝろ』再説」岩波書店『文学』56(5), pp.7-21.
- 森松健介 (2015) 「ジョン・クレアとトマス・ハーディ」中央大学人文科学研究所『人文研紀要』(82), pp.1-28.
- 山本伸子 (1998) 「単元『生と死をみつめて』についてー夏目漱石『こゝろ』をどう扱うか」広島大学教育学部光葉会『国語教育研究』41, pp.133-147.
- 由井はるみ (2000) 「こんな愛もある」浜本純逸編『学びとしての知の方法』明治図書, pp.69-114.
- 吉田茂樹 (2009) 「学習者が「初読の読者」として意欲的に小説学習に取り組む方法の研究ー結末を省略したテキストを用いた『こゝろ』の指導を通してー」全国大学国語教育学会『国語科教育』65, pp.67-74.

[欧文]

(教育施策文書)

- The Assessment and Qualifications Alliance (AQA) (2012)*GCSE Specification English Literature 9715*
- AQA (2015 a) *GCSE English Literature Unit 1 Exploring modern texts, Higher Tier June 2015 97151H.*
- AQA (2015 b) *GCSE English Literature Unit 1 Exploring modern texts, Mark Scheme 97151H.*
- DES (1975) *A language for life : report of the Committee of Inquiry appointed by the Secretary of State for Education and Science under the Chairmanship of Sir Alan Bullock, H.M.S.O., London.* (通称 *Bullock Report*), HMSO.
- DES (1985) *GCSE :The National Criteria*, HMSO
- Department for Education (DfE) (2014)*English programme of study : key stage 4 National curriculum in*

England

[https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment\\_data/file/331877/KS4\\_English\\_PoS\\_FI\\_NAL\\_170714.pdf](https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/331877/KS4_English_PoS_FI_NAL_170714.pdf) (2016年8月25日最終閲覧)

The Office of Qualifications and Examinations Regulation (Ofqual) (2012) *GCSE Subject Criteria for English Literature*

Qualifications and Curriculum Authority (QCA) (2007) *National Curriculum*

QCA(2007) *GCSEs the official student guide to the system*

(単行本)

Beers,K.,Probst,R.E., *Notice & Note: Strategies for Close Reading*, Heinemann

Blau,Sheridan (2003) *The Literature Workshop: Teaching Texts and Their Readers*, Heinemann

Davison,J.eds. (2011) *Debates in English Teaching*, Routledge

Davison,J.,Dowson,J.eds.(2009)*Learning to Teach English in the Secondary School: A Companion to School Experience (Learning to Teach Subjects in the Secondary School Series) 3rd Edition*,Routledge

Davison,J.,Daly,C.eds.(2014)*Learning to Teach English in the Secondary School: A companion to school experience (Learning to Teach Subjects in the Secondary School Series) 4th Edition*,Routledge

Kress,G. (2003) *Literacy in the New Media Age*, Routledge

Kress,G. (2010) *Multimodality: A Social Semiotic Approach to Contemporary Communication*, Routledge

Kress,G., Jewitt, C., Bourne,J., Franks,A.,Hardcastle,J.,Jones,K.,Reid,E. (2005) *English in Urban Classrooms: A Multimodal Perspective on Teaching and Learning*, RoutledgeFalmer

Lesesne, Teri S. (2010) *Reading Ladders: Leading Students from Where They Are to Where We'd Like Them to Be*, Heinemann

McCallum,A. (2012) *Creativity and Learning in Secondary English: Teaching for a Creative Classroom*, Routledge

Yandell,J. (2013) *The Social Construction of Meaning: Reading literature in urban English classrooms*, Routledge

(論文)

Bazalgette.C.,Buckingham,D. (2013)Literacy, media and multimodality a critical response, *Literacy*, 47(2), pp.95–102.

Culler, Jonathan (2010) The Closeness of Close Reading, *ADFL Bulletin*, 149, pp. 20-25.

Moretti, Franco (2009) Style, Inc. Reflections on Seven Thousand Titles (British Novels, 1740–1850), *Critical Inquiry*, 36(1), pp. 134-158.

Westbrook, J. (2007) 'Wider reading at Key Stage 3 – happy accidents, bootlegging and serial readers', *Literacy*, 41(3),pp.147–54.

Westbrook, J. (2008) Narrative reading processes and pedagogies in the secondary school. Draft. Sussex School of Education, University of Sussex.

McCallum,A. (2018)Don't knock kids for rereading books. Encourage them to read, full stop, *the guardian*, 2018.2.23.<https://www.theguardian.com/commentisfree/2018/feb/23/knock-children-rereading-books-read-jeff-kinney> (2018/03/16 最終閲覧)